

日本語を媒介語とする国際学生交流

—日本語教員養成論の観点から—

沖 裕子

キーワード：国際学生交流 日本語教員養成 媒介語としての日本語
国際化する日本語 異言語・異文化体験

1. はじめに

日本語を媒介語として行う国際交流にどのような意義があるか、日本語教員養成論の立場から、実践例に即して論じてみたい。

まず、大学の研究室単位で学生の国際交流を行うことの目的と意義、留意点について、実践報告例を交えて整理する。ここでは、日本語教員養成課程を併設した日本語教育学研究室と、国外の日本語・日本文化・日本語教育学関係の研究室との、日本語を媒介語とした事例をとりあげ、考察したい

大学の研究室単位で研究者交流とともに学生交流を行うことは、長期的にみればごく最近の事象であると思われる。限定された研究目的のためだけではなく、幅広く国際交流の機会を準備することによって何らかの実りを期待する教育的指導といってもよい。複数の研究室指導者の関与のもとに行われる国際交流では、双方の指導者が、双方の研究室の学生事情によく通じ、教育効果を複合的に展望することが必要である。時に双方の学生への視点を交えながら、ここでは、実践にたずさわった日本側の立場から主として考察する。

国際化する日本語のあり方を含めて、日本語教員養成における効果に言及したい。

2. 研究室単位の国際学生交流の目的と意義

2. 1 参加学生の性格

本稿でとりあげるのは、次のような属性をもった学生の、日本語を媒介語とする、研究室単位の国際学生交流である。

(1) 日本の大学における日本語教員養成課程を併設した日本語教育学専攻学生

(2) 日本国外の大学の日本語・日本文化・日本語教育学専攻学生

日本語を媒介語として、ある程度は研究的話題を共有することができる。しかしながら、学部学生が中心になること、また、外国語としての日本語は、多くが中級レベルであること、日本側の学生はどうしても相手国の言語・文化に関する学習が不足し

がちであること、などの実態がある。専門性を基礎としながらも、幅広い人間的な出会いの場であると考えられる必要があるであろう。

2. 2 国際学生交流の意義と効果

両国の学生に共通する意義と効果には、以下のようなものが考えられる。

- ◎異言語・異文化コミュニケーションを実感的に理解する。
- ◎相手の母語と母文化に対する認識が深まる。
- ◎自己の母語と母文化に対する認識が深まる。
- ◎長期的な交流の契機となる。
- ◎平明な日本語を使用・形成する場となる。

次に、日本側の日本語教育学専攻学生に対する意義と教育上の効果には次のようなものが考えられる。

- ◎国外の日本語教育の現状を具体的に認識することができる。
- ◎日本語教育に対する動機を向上させる契機となる。
- ◎国外の言語と文化にとりまかれる環境で、留学生の心情を実感的に理解することができる。

また、国外の大学の日語・日本文化・日本語教育学専攻学生にとっての意義と教育効果には、次のようなことが考えられる。

- ◎イマーション教育の機会となり、日本語の実際使用場面を得られる。
- ◎日本語・日本文化に関する人的、物的リソース（資源）の獲得となる。
- ◎日本語学習の動機づけが具体化する。

日本語学習に必要とされるのが「実際使用」場面であることは、伴(1997)や、ネウストプニー(1995)、宮崎里司・ネウストプニー(1999)、深沢・札幌(2000)などにも言及されている。こうした交流が実際使用場面を得るまたとない機会であることは、言を待たないであろう。ちなみに、日本語の実際使用を展開することは、外国側の話し手だけの問題ではない。言語コミュニケーションは双方向性をもつ。日本側の聞き手が、その日本語表現をどう受け止めるかも問題になるのである。また、習熟途中にある外国語としての日本語話者に対して日本語母語話者が日本語を使用する場合、自らの日本語表現を工夫し、限られた語彙・文法の範囲でいかに豊かな内容を伝えようかという課題が生じる。

日韓双方の学生にとって、こうした実際の国際交流場面が、先に述べた「平明な日本語を使用・形成する場となる」ことの所以である。この点については、第5、6節でさらに述べたい。

3. 学生指導における日本側指導者の留意点

日本側の立場から実際の交流前に留意した点について、簡単に整理してみたい。その結果については、次節に述べる。

3. 1 事前指導における留意点

事前指導において留意したことは、以下の7点である。

- (1) 目標を明確化し、参加者相互の理解を深める
- (2) 旅程等の確認を通じて相手国と日本の関係を把握させる
- (3) 言語と文化・社会・歴史・地理等に関する事前の学習を行う
- (4) 専門領域の観点から考察目標を設定させ、体験学習を企画する
- (5) 異文化接触における注意を与える
- (6) 安全に留意させる
- (7) 相手側の指導者との打ち合わせを綿密にする

3. 2 交流場面における留意点

次に、交流場面で留意した点を記す。

- (8) 指導者は双方の学生の動きに心を留めたい
- (9) 企画内容の成功させるためには、事柄の遂行とともに、感情的な満足を伴うよう配慮する。

3. 3 事後指導における留意点

事後指導については、次の点を留意した。

- (10) 交流の体験を記録にし、文章化して思索する機会を設ける
- (11) 礼状を忘れない
- (12) メール交換等の機会を積極的に設ける

4. 実践報告

4. 1 交流の概略

2000年3月6日(月)～9日(木)の四日間、信州大学日本語教育学沖研究室の学生を中心に、カトリック大学校言語文化学部日本語日本文化学科の姜研究室を訪れた。参加者、日程の概略は以下の通りである。

参加者：信州大学側（日本語教育学専攻学生）：引率 沖裕子（助教授）

大学院生 1人

学部4年 5人

学部3年 2人

学部2年 3人

学生計 11人

日程：2000年3月6日日～9日（4日間）

3月6日(1日目)

8:40 JR 松本駅改札前集合

9:02 JR 松本駅発 ワイドビューしなの

11:02 JR 名古屋駅着
バスで名古屋空港へ

12:00 名古屋国際空港着

14:30 ASIANA OZ 121 便 離陸

16:20 ソウル金浦国際空港着 (カトリック大生の出迎えを受ける)
地下鉄5号線でカンナル駅へ

18:00 宿泊先 テハジャンに到着

18:30 夕食

21:00 宿泊先でカトリック大生をまじえ親睦会

22:00 解散・就寝

3月7日(2日目)

9:00 宿泊先を出発
カトリック大生とともに貸切バスにて天安へ

10:30 独立記念館到着・見学

17:30 独立記念館出発

19:00 宿泊先到着
夕食会(カトリック大生とともに)

3月8日(3日目)

8:45 宿泊先出発
朝食
地下鉄でカトリック大学校へ

11:00 カトリック大学校言語文化学部訪問
国際交流所長文明淑先生ご招待の昼食会
(姜錫祐先生、カトリック大学生とともに)

13:00 於大学セミナーハウス [指導:カトリック大学校姜錫祐、信州大学沖裕子]
記念品贈呈、返礼
独立記念館見学に関する討論会「日韓交流について」

15:00 民族衣装ハンボック・和服体験学習・写真撮影

16:00 夕食会(カトリック大生とともに)

17:00 日語日本文化学科3年生の日本語授業見学・教壇補助体験学習
[指導:カトリック大学校津崎浩一・中野敦]

19:00 姜研究室にて記念撮影
20:00 日本語カラオケへ（カトリック大生とともに）
22:00 地下鉄で東大門へ（両大学学生のみ）
23:00 東大門を散策
27:00 宿泊先到着
3月9日（4日目）
9:00 宿泊先出発
10:00 ソウル金浦国際空港 到着
12:00 ASIANA OZ 122便 離陸
13:00 名古屋国際空港到着
15:30 JR名古屋駅到着
16:00 同駅発 ワイドビューしなの
18:00 JR松本駅着 反省会
20:00 解散

4. 2 事前指導

事前の準備は不足していたが、日本語教育学を専攻する学生としての蓄積があると割り切り、目的を明確化させることを重視した。また、日本側の参加者がお互いの体験や、考え方、感じ方を気軽に話し合える雰囲気を作ることも心がけた。

以下、覚書程度ではあるが、記す。

(1) 目標を明確化し、参加者相互の理解を深める

- ・事前に学習会を設け、全員に共通する目標をたてた。
- ・同時に、各自の目標も設定させた。
- ・学習会は、日本側の参加者が事前に知り合う機会としても位置づけた。

(2) 旅程等の確認を通じて相手国と日本の関係を把握させる

(3) 言語と文化・社会・歴史・地理等に関する事前の学習を行う

- ・企画立案から実行まで約1ヶ月しかなかった。
- ・半日ほどの学習会を2回設けた。
- ・簡単な日韓語対照講座を開いた。
- ・社会・歴史・地理当に関しては参考文献をあげ、自習することとした。

(4) 専門領域の観点から考察目標を設定させ、体験学習を企画する。

- ・日本語の授業見学の許可を得たことをあらかじめ伝えた。

(5) 異文化接触における注意を与える

- ・異なる行動様式に接した場合にも冷静に受け止め、考えること。

- ・礼儀を忘れないこと。
- ・以上2点を示唆した。

(6)安全に留意させる

- ・移動中の安全には留意するよう指示した。班を作り、伝達と確認が確実に行われるようにした。

(7)双方の指導者のあいだで、打ち合わせを綿密に行う

- ・指導者双方の打ち合わせという点でいえば、準備の時間的余裕がまったくなかった。旧知の研究者である姜錫祐氏の多大なご配慮でいろいろ事が進んだとあってよいであろう。なお、事前の連絡には、電話と電子メールを用いた。

4. 3 交流場面における指導

(8)指導者は双方の学生の動きに心を留めたい

(9)企画内容の成功させるためには、事柄の遂行とともに、感情的な満足を伴うよう配慮する

交流は相互行為であるから、自分の側の学生の動きの把握と指導は事前に十分にし、実際の出会いの場では、指導者は、双方の学生の状態をあわせて把握したい。また、研究室相互が対等の意識をもち、理解と共感とお互いへの配慮を育てるには、学生の感情的な交流の面を軽視してはならないだろう。

こうした点については、今回成功したといえる。

4. 4 事後指導

(10) 交流の体験を記録にし、文章化して思索する機会を設ける

- ・帰国一週間後の卒業式までに、感想文を提出させた。

(11) 礼状を忘れない

- ・松本市を紹介する絵葉書で、各自礼状を作成した。

(12) メール交換等の機会を積極的に設ける

- ・その後のメール交換は活発な模様。

全員無事に帰国することができたのは、何よりであった。

5. 日本語を媒介語とした国際交流の意義と日本語教員養成における効果

コントロールされた平明な日本語で、大人が聞くにたえる内容を表現する力を養うことは、日本語教員となるための基礎的な訓練である。しかしながら、日本語教授法という枠内では、教員の日本語力の訓練と目的は、教室で教科書に即して説明する教授技術の養成に限定されがちであるといえなくもない。

国際交流の場では、媒介語の日本語で平明に自分自身の思索内容や感情を述べることが求められる。こうした日本語使用のあり方は、母語話者同士の日本語使用にはな

い場を提供している。また、これまでの日本語の実体計画ともやや異なった方向を示す。

言語政策上、共通語として通用する日本語が模索されてきた流れがある。それはどちらかといえば、漢語や洋語の素養を下敷きにし、方言語彙も必要に応じてとりこみながら、言語的同質集団に対して、細やかで豊かな「標準語」を発達させる方向を目指したものである。国際媒介語としての日本語は、できるだけ簡素な語彙、文法、表現を用いて、豊かな内容を的確に相手に伝え納得してもらう方向が求められる。指示的意味はほぼ同一でありながら文体差をもつ類義語の使用で綾をつけたり、複雑な構文や表現を用いれば、平明さからは遠くなる。待遇表現の使用も必要最低限にしながら品位を保つ必要がある。

言語計画の観点から述べ直そう。平明な日本語で、果たしてどこまで複雑なことを表現しうるかという議論は、言語学的にしておかなければならないにしても、現実には日本語を媒介語とする国際交流場面がすでに出現している。国際化に伴って、こうした場面は拡大するだろう。誰にでも分かる平明な表現で、深い内容を語る言語へと成長させることが、国際化にあたって方向づけられるべき日本語変化のあり方であろう。媒介語に日本語を用いる国際交流実践のうちにこそ、まさに日本語の実体の変容、成長の契機があるともいえる。それはまた、外国語としての日本語表現を、真摯に聞く力でもある。

日本語教員養成という点でいえば、研究室単位の国際学生交流は、こうした方向性で自己の日本語力を磨いていく生きた場を準備し、大学のカリキュラムによったふだんの日本語教員養成課程では提供できない実習の場を設ける得がたい機会となるものである。平明で力のある日本語力を重視するためには、双方無心に、本物の伝え合いを求める国際交流が求められなければならないだろう。

6. 国際交流場面での日本語実践例

さて、述べてきた事例においては、大きな目的のひとつに、日韓双方の学生が喜びをもって日本語で伝え合いを行うことがあげられる。実際につきそってみて、その点はまったく問題なく進んだとあってよい。ただし、次のようなことがあった。

独立記念館は、韓国では修学旅行先によく選ばれている。しかし、行きの貸し切りバスの中で質問したところ、初めて訪れる韓国人学生も数人含まれていた。(注1)

見学を終えた帰路のバスの車中では、なまなましい日本軍の拷問場面の蝸人形を見て、少々青ざめた顔の学生が日韓双方にみられた。そこで、翌日のカトリック大学校の討論会でのスピーチで、そのことにもふれることにした。

以下は、カトリック大学生の日本語力に配慮して作成したスピーチ草稿である。実

践の一報告事例として記録しておく。なお、以下は、見学翌日の学生同士の討論会に間に合わせるため、練る時間もなく、ホテルから大学への電車の中で用意したメモである。討論会の最後に、出席した日韓両校の学生約25人の前で、ほぼ読み上げる形で話した。

「討論会を終えたカトリック大生と信州大生の皆さんへ」

2000年3月8日（水）

於カトリック大学校（大韓民国）

信州大学人文学部 沖裕子

みなさん、どうもありがとうございました。

関淳奎（みん すんぎゅ）さんが、「独立記念館を一緒に見学しよう」と言いました。関さんのおかげで、私たちは独立記念館を見学できました。関さんは、カトリック大学校の学生の皆さんと信州大学の学生の皆さんとの架け橋です。まず、関さんに感謝したいと思います。

さて、独立記念館を見学して、私はふたつのことを思いました。

第1番目は、戦争を起こしてはいけない、ということです。

世界中で戦争が起きました。昔も起きました。今も起きています。戦争が起きるとどうなるのでしょうか。人間は悪いことをします。なぜなら、相手のことを信じられなくなるからです。

「拷問が怖い」と思った人は手をあげてください。では、はじめて拷問を見た人、拷問のことを考えた人は手をあげてください。

人間は拷問という恐ろしいことをします。昔の日本軍だけではありません。世界中で、もっと恐ろしいことが起きました。そして、今も起きています。平和な時には、拷問をしません。戦争が起きると拷問をするのです。もし、命令されれば、あなたもするかもしれません。私もするかもしれません。戦争をしてはいけない。これが大切なことです。

第2番目。それは、勉強は大事だ、ということです。

勉強とは何でしょうか。皆さんはどう思いますか。自分の心でよく感じる。自分の頭でよく考えること。私はそれが大切だと思います。本当のことを知るのには難しいです。本当のことは、なかなか知ることができません。

先ほどの拷問もそうです。2000年前。イタリアのローマ時代、キリスト教徒はライオンに食べられました。みんながそれを見て、喜んだのです。ナチスがユダヤ人をたくさん殺しました。これも大変なことです。広島原子爆弾でも、ふつうの人がたくさん殺されました。子供も大人も、みんな、からだの皮がむけて死にました。

日韓両国の不幸な歴史を、私たちは知らなければなりません。独立記念館で見たことは

たしかに起こったことです。しかし、すべてではありません。

人間の歴史を、自分の目で見て知って下さい。

自分の頭で考えて、本当の姿を見つけて下さい。

それには、学問や勉強が必要です。そして、強くてやさしい心が必要です。そしてまた、経験も必要です。ここに居る若い皆さんに期待いたします。

最後になりましたが、このような交流の機会を与えて下さいました姜錫祐（かん そくう）先生、そして、私共を案内して下さいました申善字（しん すんじゃ）代表始めカトリック大学の学生の皆さんに心から感謝申し上げます。カムサハムニダ。

上述のスピーチは、学習者（カトリック大生）にとって、共有体験をもとに、ある考え方を日本語で聞き、日本語で思考する機会が得られるよう配慮して作成したものである。

語彙的にいえば、延べ語数 510、異なり語数 171 である。(注2) 171 語が既習語彙かどうかは未調査。主として単文で構成し、複文使用をおさえた。待遇表現は、尊敬・謙譲語の使用はさげ、丁寧語のみにした。ただし、最後の挨拶部分には意図的に前者を用いた。また、日本語表現そのものは、できるだけ正格を旨とし、同席している日本人学生にとっても満足できる日本語表現をこころがけた。この事例に対する評価は別として、作成経験を記せば、限られた日本語表現ではあるが、述べたい内容の基本はおおむね表現しえたように思う。

7. おわりに

日本語教育の観点から、研究室単位の学生国際交流の意義と留意点について、実践例に即しながらまとめてきた。

最後に、日本語教員養成という観点から、こうした活動の意義について、以下の2点について改めてまとめておきたい。

- (1) 日本語を媒介語とする研究室単位の国際学生交流は、きわめて現代的な現象である。こうした異言語・異文化コミュニケーションについて体験させることは、研究の素地としての実感的国際感覚を身につけた日本語教員の養成につながる。
- (2) 国際交流実践は、日本側からみれば、外国語としての日本語を真摯に聞く場であり、平明な日本語で深い内容を表現する力を試される場でもある。日本語教員養成からいえば、ふだんのカリキュラムではできない、日本語力の養成を行う場となることが重要である。この力は、国際媒介語としての日本語に要請されるもので、漢語や洋語の素養を下敷きとした、従来的高度文脈依存型の表現とは異なった日本語使用状況に支えられて養成を促されるものである。

日本語教員養成課程は、1985年に大学専門課程に設置が認められたばかりである。日本語教育学の重要な一領域である「日本語教員養成論」は、携わる研究者の数も少なく十分な研究が行われていない。また、日本語教授法、日本語概説、専門日本語教育研究、日本語教育事情、日本語教育史など、個別領域の研究は着手されているが、日本語教育とは何かを包括的に考察する「日本語教育学概論」もみあたらない。教科書は『概説日本語教育（改定版）』（遠藤織枝編 2000年 三修社刊）を除いては1冊もない出版状況である。模索途上の若い学問として、実践と観察を続けながら、研究面で日本語教育学を充実させることを今後の課題としたい。

最後に、カトリック大学校の姜錫祐氏はじめ、関係の諸先生方、また、ともに行動した日韓学生の皆さんに謝意を表します。

【注】

注1：独立記念館は、「1986年、文部省の検定を得た日本の教科書が侵略戦争を美化している」という韓国の反発を契機に、韓国民の寄付で作られた（金両基監修(1993)『世界の歴史と文化韓国』新潮社 79頁）

注2：橋本文法の単語単位見出しでの計量。

【参考文献】

大坪一夫(2000)「専門日本語教育研究の一方向(2)」『専門日本語研究』第2号

沖 裕子(近刊)「日本語教育学と方言学—学の樹立改変と談話研究への広がり」『国文学』平成13年10月号 学燈社

鈴木孝夫(1995)『日本語は国際語になりうるか』講談社

田中克彦(1993)『ことばのエコロジー—言語・民族・「国際化」—』農山漁村文化協会

日本語教員養成課程調査研究委員会(2001)『大学日本語教員養成課程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究』（文化庁委嘱調査）

ネウストプニー, J. V. (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店

伴紀子(1997)「日本語教育を支える教授法（理論）とその動向」『日本語教育』94号

深澤のぞみ・札野寛子(2000)「科学技術日本語読解教材の開発—「意味ある受信」を支える教材選択と「意味ある発信」を実現させるタスク練習—」『専門日本語教育研究』第2号

宮崎里司・ネウストプニー, J. V. (1999)『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論にむけて—』くろしお出版

(信州大学人文学部・助教授)